

田村 16

— 田村遺跡第22次調査、第23次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1080集

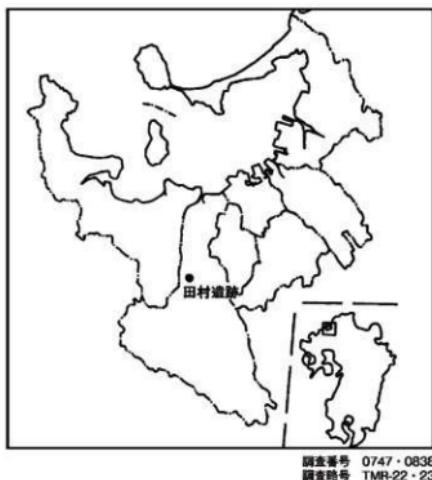
2010

福岡市教育委員会

TAMURA
田村 16

たむら
— 田村遺跡第22次調査、第23次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1080集



2010

福岡市教育委員会

序

海に開かれたアジアの交流拠点都市づくりを目指す福岡市は、大陸文化の受入口として古来より繁栄してきました。市内には貴重な文化遺産が数多く残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私たちの義務であります。本市では市内で行われる諸開発によって、やむなく失われる遺跡を記録として後世に残すため発掘調査を行っています。

本書もそうしたなかでの一つで、早良区田村4・5丁目地内において市道有田重留線道路改良事業に伴って発掘調査を実施した田村遺跡第22・23次調査の記録を収録したものです。

調査の結果、縄文時代から中世にかけての遺構や遺物を検出し、長きにわたって本地域に集落が営まれた事が確認できました。

つきましては、本書が市民の皆様の文化財に対する認識ご理解につながり、学術研究、文化財保護の普及啓発活動に活用していただければ幸いに存じます。

また、ご協力をいただきました関係者各位、地元をはじめ調査を支えられた多くの方々に深く感謝いたします。

平成22年3月23日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

凡　例

1. 本書は、本市道路下水道局道路建設部西部道路建設課が実施した、早良区田村4・5丁目地内の市道有田重留線道路改築事業に伴う事前調査として、本市教育委員会埋蔵文化財第2課が平成20年、21年度に実施した田村遺跡第22次、第23次調査の報告書である。
2. 調査は第22次調査で阿部泰之が、第23次調査を山崎龍雄が担当して行った。
3. 本書に用いた方位は旧国土地標第2系による座標北および磁北で、磁北は座標北に6°10'西偏する。
4. 調査区は旧国土地標第2系を基準として、5m方眼グリッドを設定し、グリッド呼称は北西交点とした。
5. 遺構の呼称は略号化し、竪穴住居→SC、溝・自然流路→SD、土坑→SK、不定形・不明土坑→SX、柱穴→SPとした。
6. 本書に使用した遺構実測図は、第22次調査が阿部泰之、第23次調査が山崎龍雄・瀬戸啓治・田中昭子・西野光子・真田弘二による。
7. 本書に使用した遺物実測図は、第22次調査が阿部泰之、平川敬治、第23次調査が山崎龍雄、平川敬治による。
8. 製図は第22次調査が阿部泰之、第23次調査が山崎龍雄が行った。
9. 本書に用いた遺構・遺物写真は各調査担当者が撮影し、第22次調査の全景空中写真撮影は写滿エンジニアリング株式会社、第23次調査の全景空中写真撮影は有限会社空中写真企画に委託した。
10. 第23次調査出土の木質遺物の樹種同定・炭素14年代測定については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託して行った。
11. 調査に係る記録類・出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用していく予定である。
12. 本書の執筆は、第22次調査は阿部泰之、第23次調査は山崎龍雄が行い、編集は阿部泰之の協力を得て山崎が行った。

本文目次

第1章 はじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の組織	1
3 遺跡の立地と歴史的環境	2
第2章 第22次調査の記録	5
1 調査概要	5
2 遺構と遺物	5
3 小結	11
第3章 第23次調査の記録	13
1 調査の概要	13
2 I区の調査	13
3 II区の調査	15
4 III区の調査	21
5 IV区の調査	25
6 田村遺跡第23次調査の自然科学分析	31
7 小結	34

挿図・写真図版目次

《第1章 はじめに》

Fig.1 有田重留線調査区位置図(1/6,000)	3
Fig.2 田村遺跡と周辺の遺跡(1/25,000)	4

《第2章 第22次調査》

挿図目次

Fig.3 調査区東壁土層断面実測図(1/100)	5
Fig.4 第22次調査区全体図(1/200)	6
Fig.5 SB33実測図(1/60)	7
Fig.6 SD02上層断面実測図(1/60)	7
Fig.7 SD02実測図(1/120)	8
Fig.8 SD02上層出土土器実測図(1/3)	8
Fig.9 SD02下層出土土器実測図(1/3)	8
Fig.10 SD04実測図(1/60)	9
Fig.11 SD04出土土器実測図(1/3)	9
Fig.12 SK05・SP06実測図(1/30)	10
Fig.13 ピットおよび遺構検出面出土土器実測図(1/3)	10
Fig.14 旧河川出土遺物実測図(1/3)	11

写真図版

1 調査区全景(南より)	12
2 調査区拭張後全景(南より)	12
3 調査区東壁土層(西より)	12
4 SD02上層(北より)	12
5 SP06遺物出土状況(北より)	12

6 SK05 (北より)	12
--------------------	----

《第3章 第23次調査》

挿図目次

Fig.15 第23次調査区配置図(1/400)	14
Fig.16 II区遺構全体図(1/150)	15
Fig.17 II区調査区各壁土層(1/100)	16
Fig.18 SK01と出土遺物(1/30・1/3)	16
Fig.19 II区遺構全体図(1/150)	17
Fig.20 II-1区西・北壁土層(1/80)	18
Fig.21 II-1区縄文確認グリッド配置図(1/200)	19
Fig.22 II-1区各遺構出土遺物(1/3・1/1)	19
Fig.23 II-2区各壁土層と出土遺物(1/80・1/3・1/2)	20
Fig.24 III区SD30東・北壁土層(1/80)	21
Fig.25 III区遺構全体図(1/150)	22
Fig.26 縄群SX24・27(1/30)	23
Fig.27 III区各遺構出土遺物(1/3)	23
Fig.28 III区縄文確認グリッド配置図と土層(1/200・1/60)	24
Fig.29 IV区遺構全体図(1/150)	26
Fig.30 IV区西・東壁土層(1/80)	27
Fig.31 IV区各遺構出土遺物(1/3・1/2・1/1)	28
Fig.32 SD59・61、SK62、SX63(1/80)	29
Fig.33 SX63出土遺物(1/3・1/15)	30
Fig.34 第21～23次調査区遺構配置図(1/1500)	折り込み

写真目次

PL. 1 (1) 路線全景(北から) (2) 調査区全景(南から)	35
PL. 2 (1) 調査区全景(上から) (2) I区全景(南から)	36
PL. 3 (1) SK01(東から) (2) I区調査区北壁土層状況(南から) (3) II-1区全景(上から)	37
PL. 4 (1) II-1区全景(南から) (2) SD04検出状況(北から)	38
PL. 5 (1) 縄文確認グリッド配置状況(北から) (2) SD04縄文土器出土状況 (3) 調査区西壁土層(南東から) (4) SD04北壁土層(南から)	39
PL. 6 (1) II-2区全景(北西から) (2) SX17(西から) (3) II-2区西壁土層(東から)	40
PL. 7 (1) SX18遺物出土状況(西から) (2) III区全景(北から)	41
PL. 8 (1) 縄群SX24・27(北東から) (2) SX24(南西から) (3) SX27(北西から) (4) SD30(南西から) (5) SX34(南西から)	42
PL. 9 (1) III・IV区全景(上から) (2) IV区全景(西から)	43
PL.10 (1) IV区第1面南側SD51・52検出状況(北西から) (2) 同 第2面遺構検出状況(南から)	44
PL.11 (1) 第2面SD59・61(南から) (2) SD59(北西から) (3) SD59・61(北西から) (4) SK62(西から)	45
PL.12 (1) SX63、SD59・61(北西から) (2) SX63(西から)	46
PL.13 (1) SX63縄文土器出土状況(北西から) (2) 同 倒木出土状況(西から) (3) 同 倒木根柢の状況 (4) 各遺構出土遺物1(縮尺不統一)	47
PL.14 各遺構出土遺物2(縮尺不統一)	48

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

平成18年6月9日、本市道路下水道局（当時土木局）道路建設部西部道路建設課より、早良区田村4・5丁目、重留7丁目地内において、市道有田重留線道路改築事業計画策定を行うに当って、埋蔵文化財の有無の照会のための事前審査の依頼が埋蔵文化財第1課に提出された。申請面積は16,200m²、受付番号は18-1-35である。これを受け、埋蔵文化財の有無を確認したところ、申請地は田村遺跡の範囲内で、隣接地は田村団地造成に伴って調査が行われていた。そのため、遺構の存在が確実な部分を除いた部分について同年8月23・24日に確認調査を実施し、埋蔵文化財の包蔵を確認し、同年9月22日付け教理第1-35で遺跡あり要調査の回答を行った。

本課では原局と協議を重ね、工事により遺跡の現状保存は困難であると判断し、18年度から20年度にかけての3ヵ年で道路下水道局道路建設部から発掘調査費用の令達を受けて調査を行うこととなった。平成18年度・19年度の発掘調査は、第21次調査（「田村15」2009年刊行）が平成18年11月8日から19年4月27日まで、第22次調査が平成19年10月31日から20年1月31日まで、平成20年度に第23次調査を、平成20年9月1日から11月21日まで実施した。本書は上記の第22次・第23次調査の報告である。

調査にあたっては原局、工事関係者、及び地元田村団地の方々に多大な協力を受けた。記して感謝の意を表する次第である。

2. 調査の組織

調査委託	道路下水道局道路建設部西部道路建設課
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 山田裕嗣
調査総括	【平成19年度】文化財部長 矢野三津夫 埋蔵文化財第2課長 力武卓治 調査第1係長 杉山富雄
	【平成20年度】文化財部長 矢野三津夫 埋蔵文化財第2課長 田中寿夫 調査第1係長 杉山富雄
調査庶務	【平成19年度】文化財管理課 鈴木由貴 【平成20年度】文化財管理課 古賀とも子
試掘調査担当	埋蔵文化財第1課事前審査係 星野恵美
調査担当	【平成19年度】第22次調査 埋蔵文化財第2課 調査第1係 阿部泰之 【平成20年度】第23次調査 埋蔵文化財第2課主任文化財主事 山崎龍雄
調査作業	【第22次調査】浅井伸一 井上正通 櫻田信一 緒方キヌ子 栗木昭孝 近藤由美 田口恵子 津田照子 中村 宏 西口キミ子 西野光子 森下初美 森弘品子 【第23次調査】浅井伸一 安部みゆき 井上節子 井上正通 櫻田信一 栗木昭孝 近藤由美 真田弘二 茂末加世子 濑戸啓治 田中昭子 土橋一則 徳永洋二郎 中村秀策 西野光子 原田由紀子 松本康子 三角章夫 三角チエ子 森下初美 森弘品子 吉田勝善
整理作業	【第22次調査】鈴木諒子 樋口久美子 平川敬治 【第23次調査】木藤直子 渋谷健二 平川敬治

3. 遺跡の立地と歴史的環境

田村遺跡は、福岡市の西南部に位置する早良平野の内陸部、室見川の東側の沖積微高地上に立地する。国土地理院の五万分の一の地図「福岡」では、上から28.5cm、右から29cmの地点である。

遺跡の詳しい立地や歴史的環境については「田村15」をはじめとして、田村遺跡で行われた以下の各調査報告書で述べられているので、本報告書では割愛する。それらを参照にされたい。

田村遺跡関連報告書

- 『高柳遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第70集 1981
『田村遺跡 - I -』福岡市埋蔵文化財調査報告書第89集 1981
『田村遺跡 - II -』福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集 1984
『田村遺跡 - III -』福岡市埋蔵文化財調査報告書第167集 1987
『田村遺跡 - IV -』福岡市埋蔵文化財調査報告書第168集 1987
『田村遺跡 - V -』福岡市埋蔵文化財調査報告書第192集 1988
『田村遺跡 - VI -』福岡市埋蔵文化財調査報告書第200集 1989
『田村遺跡 - VII -』福岡市埋蔵文化財調査報告書第216集 1990
『田村遺跡 - VIII -』福岡市埋蔵文化財調査報告書第302集 1992
『田村遺跡 - IX -』福岡市埋蔵文化財調査報告書第384集 1994
『田村遺跡 - X -』福岡市埋蔵文化財調査報告書第385集 1994
『田村遺跡 - XI -』福岡市埋蔵文化財調査報告書第423集 1995
『田村遺跡12』福岡市埋蔵文化財調査報告書第524集 1997
『拾六町亀田1 次郎丸高石4 田村13』福岡市埋蔵文化財調査報告書第612集 1999
『田村14』福岡市埋蔵文化財調査報告書第611集 1999
『田村15』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1031集 2009

第22次調査基本情報

遺跡名	田村遺跡	調査次数	22次	調査略号	TMR-22
調査番号	0747	分布地図図幅名	No.83 野芥	遺跡登録番号	0317
申請面積	16,200m ²	調査対象面積	883.00m ²	調査面積	495.95m ²
調査期間	2007年10月31日～2008年1月31日			事前審査番号	18-1-35
調査地	福岡市早良区田村4丁目地内				

第23次調査基本情報

遺跡名	田村遺跡	調査次数	23次	調査略号	TMR-23
調査番号	0838	分布地図図幅名	No.83 野芥	遺跡登録番号	0317
申請面積	16,200m ²	調査対象面積	1,442m ²	調査面積	781.00m ²
調査期間	2008年9月1日～11月21日			事前審査番号	18-1-35
調査地	福岡市早良区田村4丁目地内				

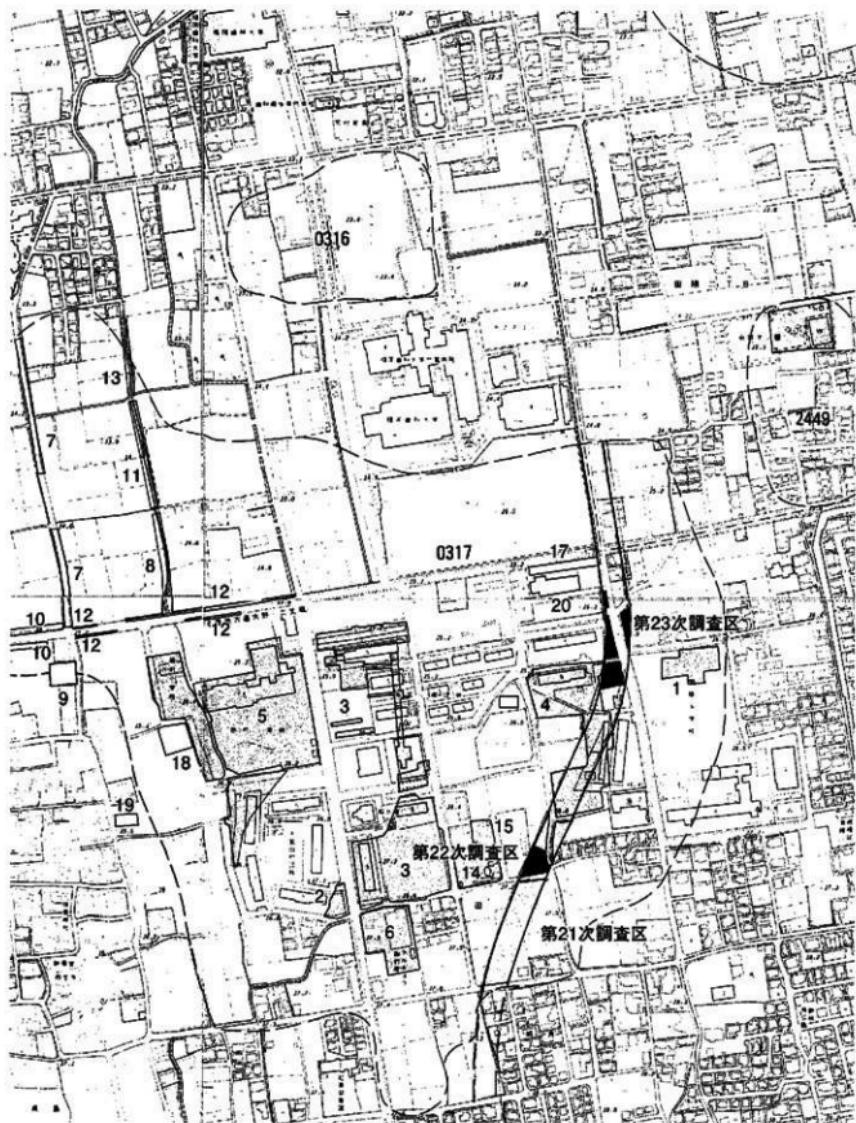


Fig.1 有田重留線調査区位置図 (1/6,000)

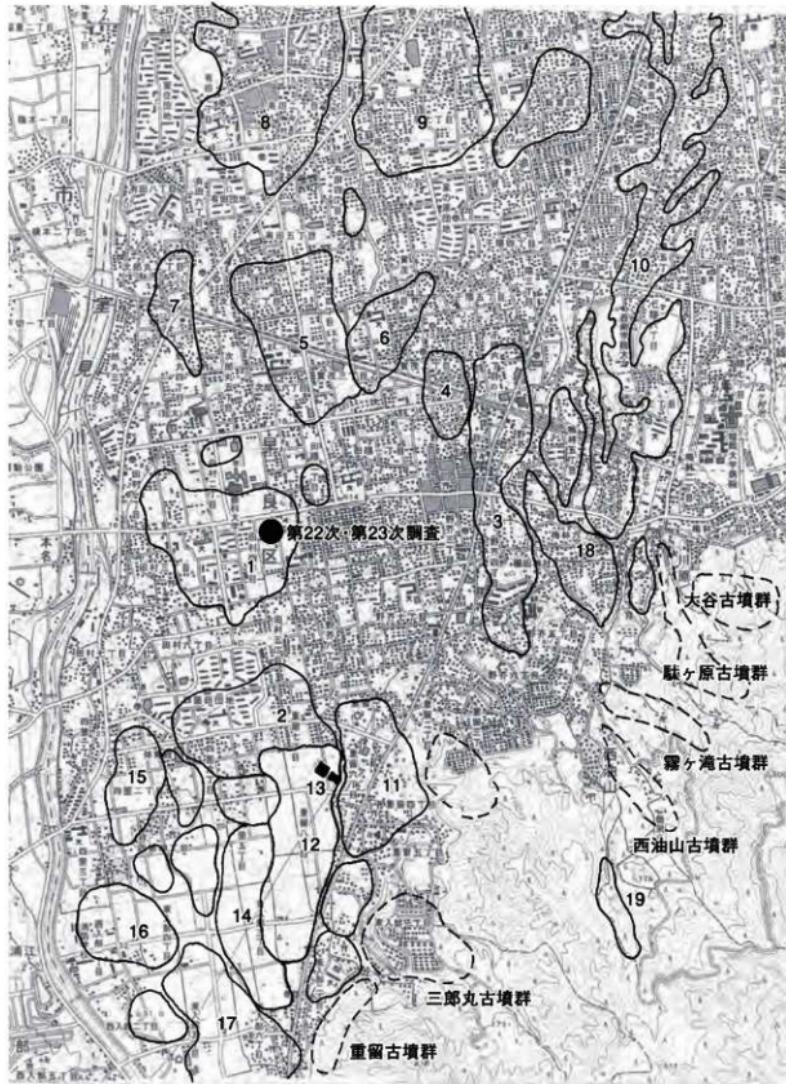


Fig.2 田村遺跡と周辺の遺跡 (1/25,000)

第2章 第22次調査の記録

1. 調査概要

ここで報告する第22次調査区は田村遺跡推定範囲の南東端部に位置し、平成18年度実施の第21次調査で未調査となっていた部分の調査である。遺構は盛り土下の旧耕作土・床土の直下、黄褐色砂礫層上にて検出される。

第22次調査で検出された遺構は、溝1条・土壤1基・掘立柱建物1棟・ピットである。溝は非常に浅く深さ5cmに満たない部分もある。土壤は径約80cmの略円形で断面形は碗形である。掘立柱建物は柱筋が若干不整だが1×2間の建物となる。柱穴は径30cm前後と小さく深い。調査区南部は砂礫が堆積し旧河川となる。旧河川の河床は暗褐色シルトとなるが、この層から縄文時代晚期～弥生時代前期にかけての土器片がコンテナケース1/5箱程度出土した。

今回の調査では、溝1条・土壤1基・掘立柱建物1棟・ピット等を検出した。遺構は浅く、耕作土・床土の直下で検出されることから遺構面の黄褐色砂礫層は後世に大きく削平されているものと推測される。溝は第21次調査区検出の溝に接続するもので流水の跡が観察され水路とみられる。出土遺物から10世紀後半頃まで機能していたものとおもわれる。水路は条里に沿っており旧河川から北に導水し水田の灌漑に利用されたと考えられる。旧河川河床出土の土器片は小片で磨滅し時期の特定は難しい。散漫な出土状況から上流からの流れ込みとみられる。

2. 遺構と遺物

① 掘立柱建物 (SB)

SB33 (Fig.5)

調査区東部にて検出した2間×2間の側柱建物である。東西方向の柱筋に乗る柱穴は西側の間隔が相対的に狭く、1間×2間の建物の西側に庇が付属するものの可能性がある。柱穴の概ね中心を結ぶと東西2.4m、南北3.1mを測る。SD02に切られる。柱穴は径30～40cmを測る略円形で、深さは浅く15～30cmを測る。埋土は暗褐色シルト質土で均質である。柱痕跡はいずれの柱穴からも検出できなかった。

遺物はいずれも小片で器種等は不明である。柱穴の規模、周辺で実施された調査で検出された建物の例から、SB33の時期は中世前半頃と推測される。

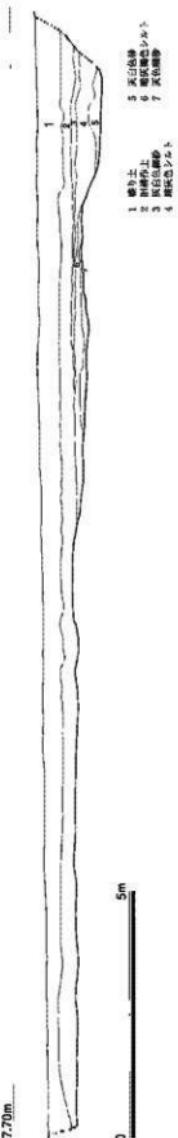


Fig.3 調査区東壁土層断面実測図 (1/100)

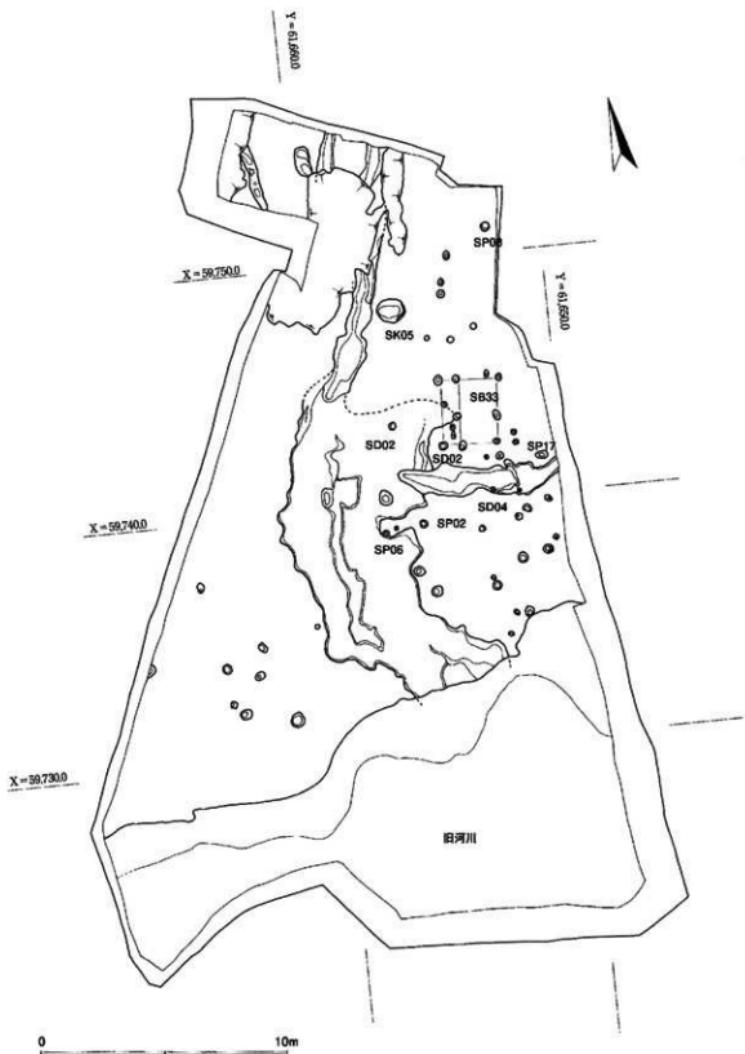


Fig.4 第22次調査区全体図 (1/200)

② 溝 (SD)

SD02 (Fig.7)

調査区中央部にて検出した。調査区を南北方向に貫流する溝である。北側にて実施された第21次調査にて検出された溝SD02に連続するものとみられる。平面形は不整で凹凸があり、やや東方向に蛇行している。幅は北側では1.2m程度だが南側は広くなり、旧河川に接続する部分では約4mとなる。断面形は浅い皿状で、深さは20~25cm、南側ほど浅く5cm程度となる。土層断面をFig.6に示す。上層がシルトで下層は砂礫となり、水の流れがあったことがわかる。上下の区分は明瞭である。砂礫で埋没し溝が機能を停止した後、浅いくぼみ状となった範囲にシルトが堆積した状況である。底面には生痕とみられる小さなくぼみが検出される部分があり、激しい水流ではなかったと推測される。

出土遺物 (Fig.8・9)

上層のシルト層からの出土遺物が多い。下層の砂礫からは遺物はほとんど出土していない。(Fig.8) 1は白磁である。底部のみ完存する破片で、器種は碗と推測される。底径4.3cm、残存高1.9cmを測る。見込みには不定方向の擦痕が観察され、釉は透明感ある灰緑色を呈する。2は土師器杯である。2/1個体残存する破片で、口径14.8cmに復元され、器高3cmを測る。器壁は摩滅し調整は不明瞭だが、外底面に板状圧痕がわずかに観察される。胎土は精良で焼成は良好である。(Fig.9) 1・2・3は黒色土器である。いずれも内外両面とも黒色で、SD02の底面直上で出土したが、接合せず暫定的に3個体として扱っている。いずれも底部のみ残存する破片で、1は底径6.7cm・残存高1.6cm、2は底径7.3cm・残存高2.6cmを測る。いずれの個体も器壁は摩滅し調整は不明瞭である。胎土は精良で焼成は良好である。3は体部の小片で、口径15cmに復元される。器壁は摩滅するが外面に一部残存しており、横方向のミガキが観察される。胎土は精良で焼成は良好である。4は土師器である。体部の小片で器種は碗と推測される。口径15.6cmに復元され、残存高3.1cmを測る。器壁は摩滅し調整は不明瞭だが、外面の口縁部直下に2条の浅い凹線が巡り、口縁部がやや肥厚するようにつくる。胎土は精良で、焼成は良好である。

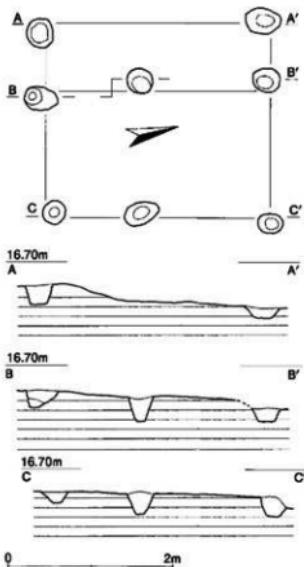


Fig.5 SB33 実測図 (1/60)

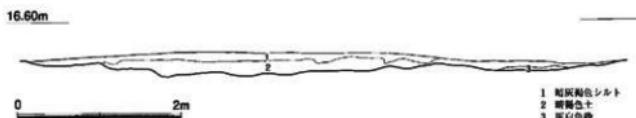


Fig.6 SD02 土層断面実測図 (1/60)

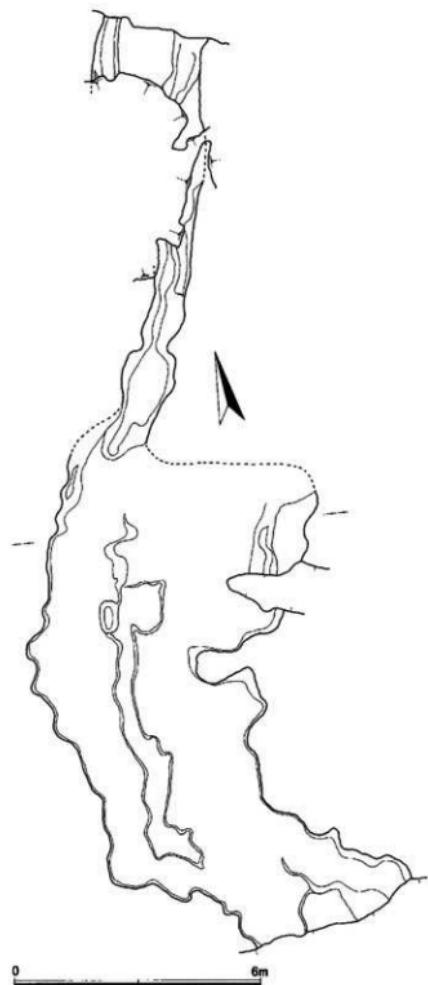


Fig.7 SD02 実測図 (1/120)

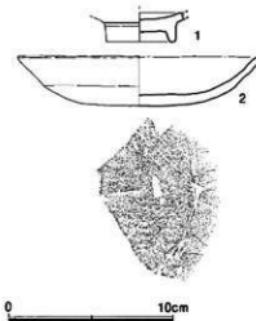


Fig.8 SD02 上層出土土器実測図 (1/3)

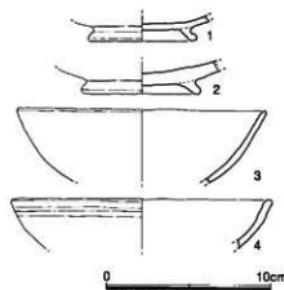


Fig.9 SD02 下層出土土器実測図 (1/3)

SD04 (Fig.10)

調査区中央部にて検出した、東西方向の溝状遺構である。延長6.6mを検出した。SD01を切る。平面形は凹凸があり不整で、やや北側に湾曲する。幅は狭いところで40cm・広いところで1.4mを測る。土層断面をFig.10に示す。

断面形は浅い皿状で、明瞭な壁面をもつとはいえない。深さは15~20cmを測る。底面は概ね平らで顕著な凹凸はみられない。中央東よりの地点で西方向に段状に標高を下げ、西側への排水を意識していたことが窺える。埋土は暗灰褐色シルト質土である。ほぼ均一な堆積で、複数の層に分層できる状態ではない。砂礫の堆積は認められず、流水のない状態での自然堆積層と推測される。

出土遺物 (Fig.11)

1~4は土師器である。1・2は小皿である。1は小皿である。小片で口径6.0cmに復元される。器壁は磨滅し調整は不明瞭である。2・3は壊ないし碗である。いずれも体部の小片で、2は残存高3.4cmを測り、口径16.4cmに復元される。3は残存高2.4cmを測り、口径17.5cmに復元される。外面に炭化物が付着する。4・5は両黒の黒色土器碗である。何れも口縁部の小片で、4は残存高1.9cm、口径13.8cm、5は残存高2.5cm、口径14.0cmに復元される。6は土師器蓋である。時期が古く混入と推測される。胴部の小片で、胴部径13.6cmに復元される。

(3) 土壌**SK05 (Fig.12)**

調査区北部にて検出した略円形の土壌である。東壁に狭い三日月形のテラスを有し、断面形は皿状である。深さは15cm程度と浅い。土層は2層に分かれ、何れも自然堆積層である。

遺物は出土しなかった。

(4) ピット (SP)**SP06 (Fig.12)**

調査区中央部にて検出した略円形のピットである。底面から浮いた状態で土師器小皿が1点出土しており、柱を抜いた後に抜き跡に投げ込んだものか。

出土遺物 (Fig.13)

1は土師器小皿である。約3/4個体残存し、口径9.1cm、器高1.2cmを測る。外底面はヘラ切りである。

(5) その他の出土遺物 (Fig.13)

2は土師器碗である。体部の小片で、口径15.4cmに復元される。SP17出土。3は須恵器蓋の小片である。SP08出土。4は瓦器碗口縁部の小片である。SP22出土。5は土師器碗または壊。底部を欠く1/4個体残存し、口径16.0cmに復元される。外底面に板状压痕が観察される。

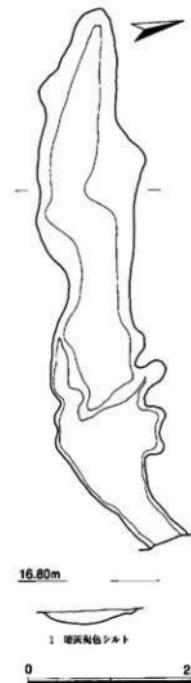


Fig.10 SD04 実測図 (1/60)

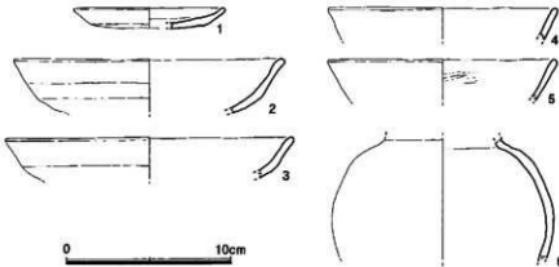


Fig.11 SD04 出土土器実測図 (1/3)

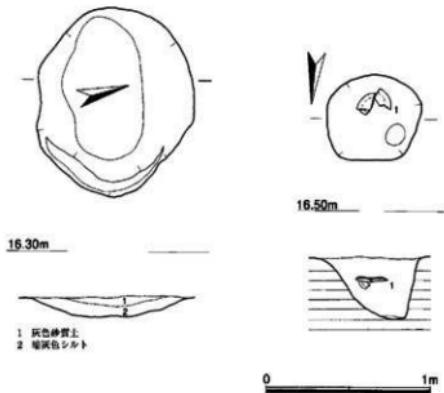


Fig.12 SK05・SP06 実測図 (1/30)

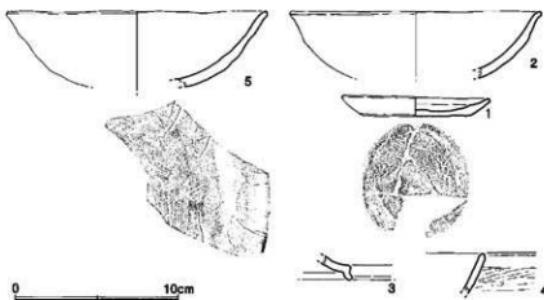


Fig.13 ピットおよび遺構検出面出土土器実測図 (1/3)

⑥ 旧河川とその出土遺物

調査区南側は旧河川である。堆積層は砂礫で土師器碗・須恵器片をごく少量含むが、その河床、暗褐色シルト質土層から縄文土器および突帯文土器が少量ながら出土した。何れも個体も磨滅し、流れ込みの状況である。

出土遺物 (Fig.14)

1~3は突帯文土器壺である。何れも口縁部の小片で、磨滅し調整等は不明瞭である。4~12は縄文土器である。11・12をのぞき何れも粗製深鉢である。4・6は口縁部の小片。6は口径24.6cmに復元される。5・7~10は胴部の小片。くの字形に屈曲するものが多く、7は胴部径32.4cmに復元される。11・12は底部である。何れも鉢形土器の底部と推測され、11は底径5.4cm、12は底径6.2cmに復元される。13は磨製石斧である。石材は緻密な安山岩質。ほぼ完形で、器長10.4cm、重量224gを測る。

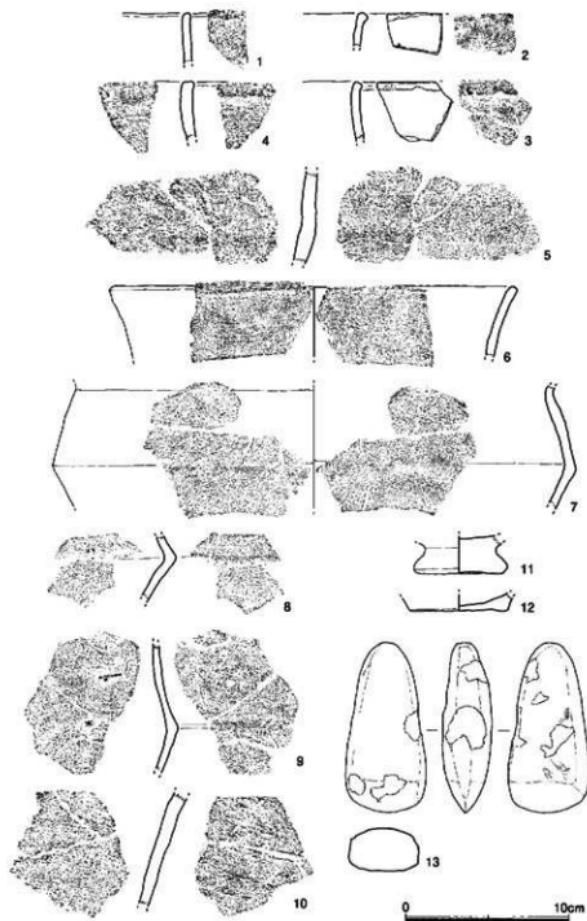


Fig.14 旧河川出土遺物実測図 (1/3)

3. 小結

今回の調査では、既往の調査で検出されている中世集落の一部を確認できた。出土遺物が少なく時期の特定は難しいが、概ね11世紀～12世紀中葉頃までと推測され、周辺の調査例からも矛盾はない。調査区南端の旧河川河床から出土した土器類は縄文時代晚期、黒川式ないし広田式から突帯文期までの時期が考えられる。何れの土器も磨滅が激しく出土状況は二次的で、上流からの流れ込みと推測される。北側の21次調査で黒川式期の集落が確認されており、その縁辺部を検出したものといえよう。



1. 調査区全景（南より）



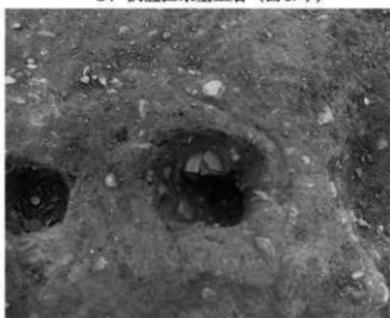
2. 調査区拡張後全景（南より）



3. 調査区東壁土層（西より）



4. SD02 土層（北より）



5. SP06 遺物出土状況（北より）



6. SK05（北より）

第3章 第23次調査の記録

1. 調査の概要 (Fig.15, PL.1・2)

調査地は早良区田村4丁目地内に所在する。田村遺跡の東側に位置し、西側は第4次・第17次・第20次調査、東側に第1次調査が行われている。周辺の調査では縄文時代の川跡や、弥生時代から中世にかけての集落跡が検出されている。

今回の調査は既存道路を利用して南から北に I ~ IV区の調査区を設定した。II区は間に団地への通路があったので II-1・II-2区に細分している。調査区の区割りは第21次調査で設定した旧国土座標第2系を基準とした5m方眼グリッドで、グリッド呼称も第21次調査に基づいている。I・II区は団地造成時に厚く盛土造成されている。遺構面はシルトまたは粘土・砂礫層で、遺構面の標高は14~15mである。検出遺構は溝・旧河川、土坑、礫群、ピットなどで、検出密度としては濃密ではない。また出土遺物も縄文時代から中世頃にかけてであるが、量としてはそれ程多くない。各区の調査面積は I 区 : 226m²、II 区 : 348m² (II-1 区 : 315m²、II-2 区 : 33m²)、III 区 : 88m²、IV 区 : 119m²である。

2. I区の調査

(1) 調査区の概要 (Fig.16・18, PL.2・3)

I区は第4次調査区の東側に隣接する調査区で、西側一部は第4次調査区と重なる。現状は団地造成時に0.6~1m前後の盛土がなされていた。遺構面までの堆積土は上から真砂土を主体とする盛土、造成時の埋立て土、水田土、オリーブ褐色(2.5YR4/6)砂礫混じり粘土～砂礫(遺構面)、褐色粘土、黒褐色砂礫となる。部分的であるがオリーブ褐色砂礫混じり粘土の上層には、黒褐色砂礫混じり粘質土が堆積する。この層は第4次調査の包含層と思われるが、出土遺物はなかった。検出した遺構は少なく、土坑や少数のピットである。土坑以外は大半が地山の浅い窪みなどである。

(2) 検出遺構

① 土坑

SK01 (Fig.18, PL.3)

調査区南西側で検出した平面形が橢円形を呈す土坑。規模は長軸0.88m、短軸0.6m、深さ0.4mを測る。断面は逆台形を呈す。埋土は上下2層に分かれる。上層は暗緑灰色土、下層は灰オリーブ粘土が主体である。水田直下であったためかグライ化している。

出土遺物 上層から中世土器の細片、下層から縄文土器細片が各一点出土。縄文土器を図示するが遺構時期としては中世であろう。Iは縄文土器の粗製深鉢の胴部片。外面は粗い条痕、内面はナデ。色調は鈍い黄橙色を呈し、胎土に1mm内外石英・長石・金雲母を含む。

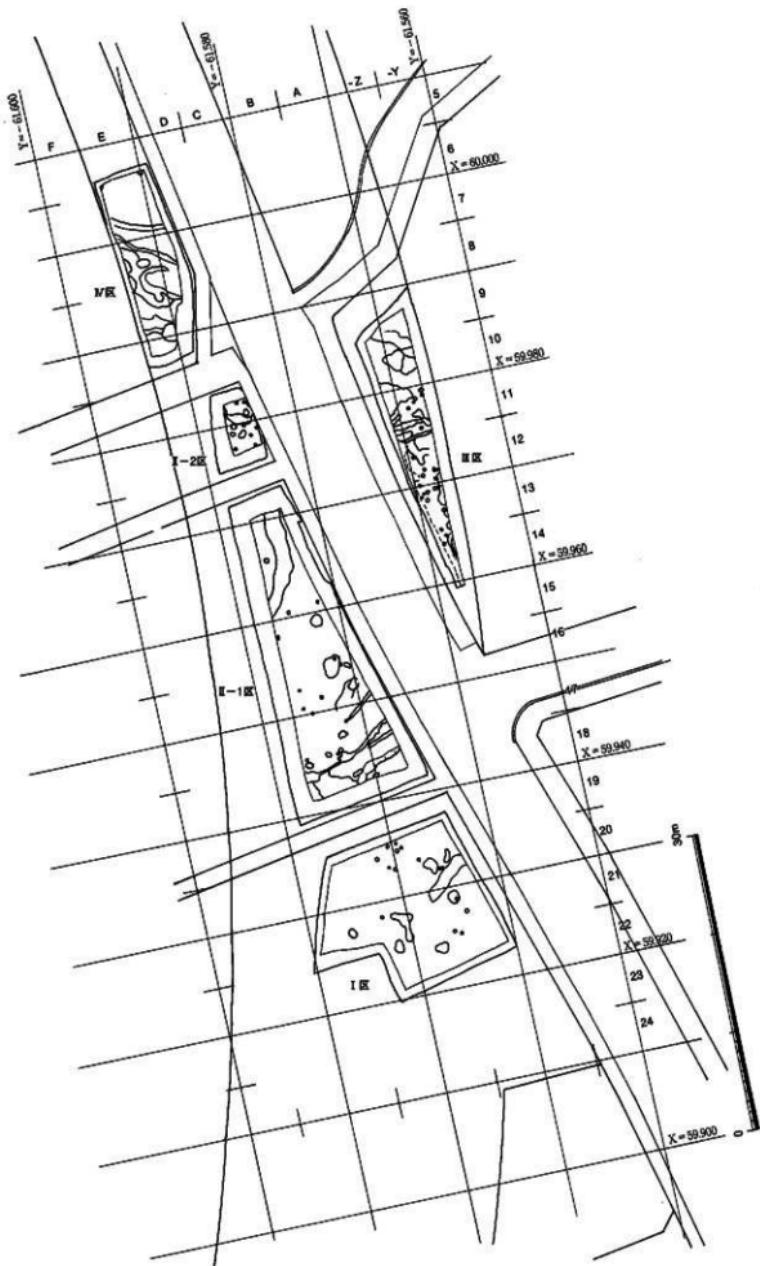


Fig.15 第23次調査区配置図 (1/400)

3. II区の調査

(1) 調査区の概要 (Fig.19~21・23)

I区の北側の細長い調査区。間に団地通路が入り、2区に細分して南側をII-1区、北側をII-2区とした。II区も団地造成に伴う盛土が厚くなっていた。遺構面までの深さは地表下1.6~1.9mで、遺構面はII-1区南側は砂礫で北側は粘土、II-2区はシルト上面である。堆積状況は図(Fig.20)のようである。検出遺構は溝4条、ピット、不定形の土坑などである。遺構面から縄文土器の細片が出土したので、縄文時代包含層存在の可能性を考えて2m四方を基本とするグリッドを22か所設定して遺物の出土状況を調べたが(Fig.21, PL.5)、遺物の出土は散漫で数が少なく、また上部からの出土で、明確な包含層、遺構の存在の確認は出来なかった。いずれも器形の判断が出来ない細片であった。

(2) II-1区の検出遺構

① 溝状遺構

4条検出したが、いずれも自然流路である。埋土はSD04以外酸化鉄分を帯びた粗砂であった。

SD04 (Fig.19・22, PL.4・5・13)

調査区北側で検出した蛇行しながら北に延びる自然流路。確認長約11m、幅1~1.8m、深さ0.3~0.35mを測る。埋土は黒褐色(10YR2/2)粘質土で砂礫を含む。埋土には自然礫石が多く含まれていた。

出土遺物 縄文土器から古代頃の土師器が少量出土。大半が細片で図示出来たものは少ない。

1は縄文土器粗製の波状口線の鉢口縁部。口縁外面は粗い幅広の条痕、口縁端部から内面はナデ。色調は灰黄褐色を呈し、胎土は2~3mmの石英・長石粗砂粒を多く混入する。5は黒曜石の石鎚。基部を欠損する。鍔身3.1cm、最大厚0.5cmを測る。丁寧な調整で、全体の形状を整えている。

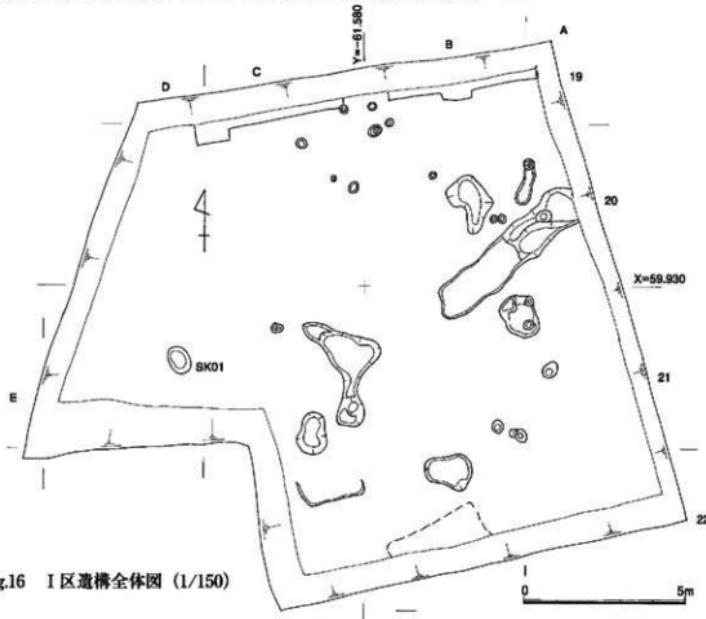


Fig.16 I区遺構全体図 (1/150)

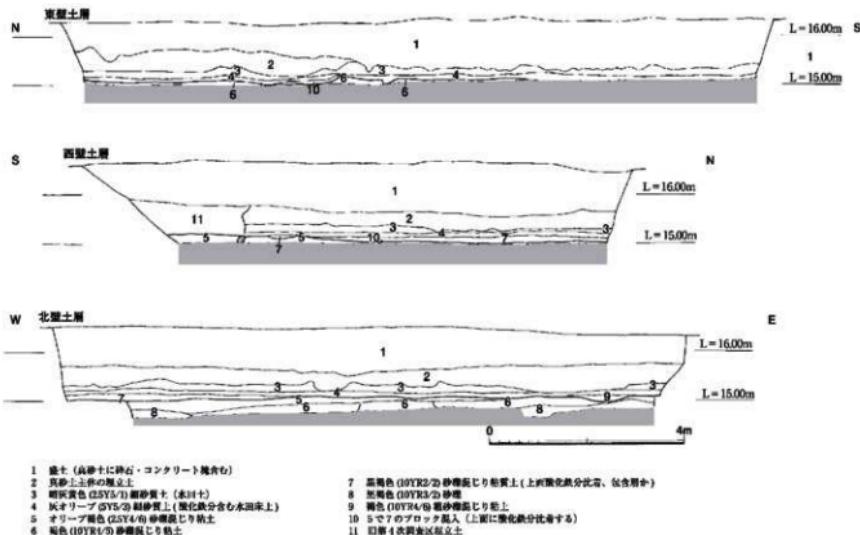


Fig.17 I 区調査区各壁土層 (1/100)

② 遺構面出土遺物 (Fig.22)

2は内傾すると思われる粗製の深鉢片。外面はヨコ方向の条痕、内面はナデ。色調は黒褐色を呈し、胎土は1~2mmの白色砂粒を多く含む。3は縄文土器底部片。調整はナデ。色調は鈍い赤褐色を呈す。4は須恵器坏身口縁片。Ⅳ期頃のもの。色調は灰色を呈し、胎土は精良。

③ 縄文グリッド出土遺物 (Fig.22, PL.13)

6は黒曜石石鏃。鏃身2.5cm、最大厚0.25cmを測る。表面は光沢を持つ細身の石鏃であるが、全面丁寧な調整を加えている。

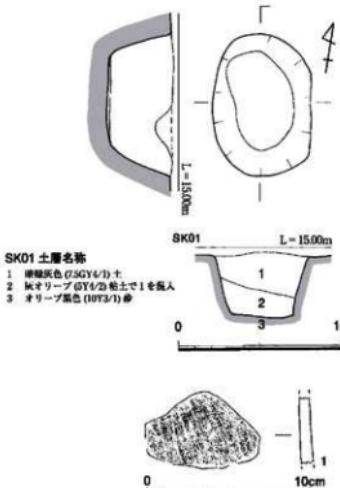


Fig.18 SK01と出土遺物 (1/30・1/3)

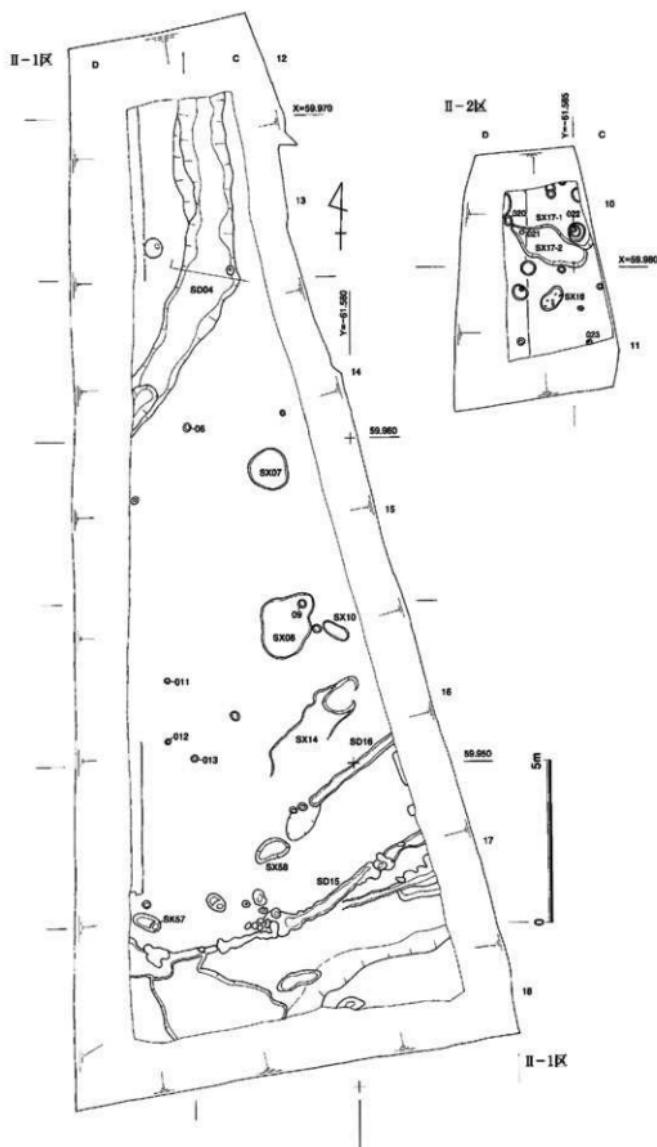
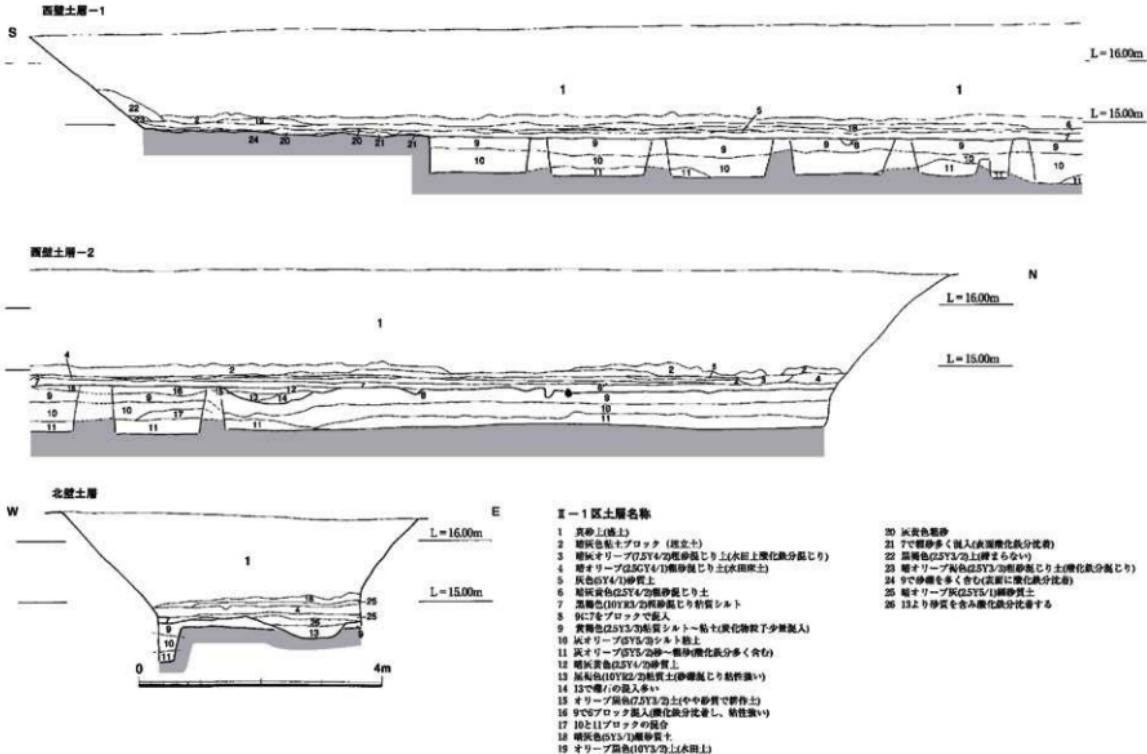


Fig.19 II区遺構全体図 (1/150)

Fig.20 II-1区西・北壁土層 (1/80)



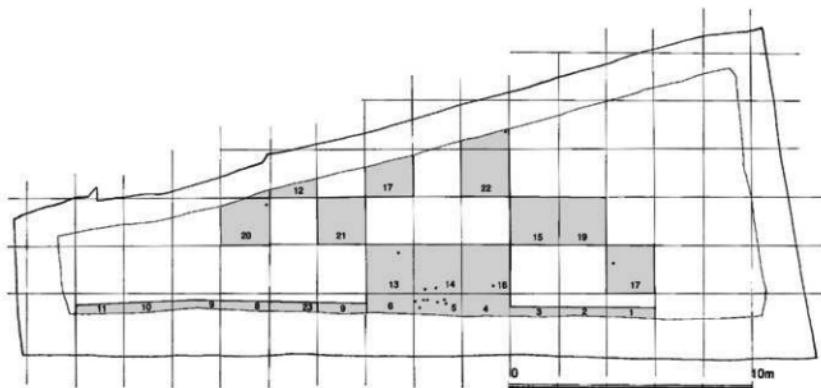


Fig.21 II-1区縄文確認グリッド配置図 (1/200)

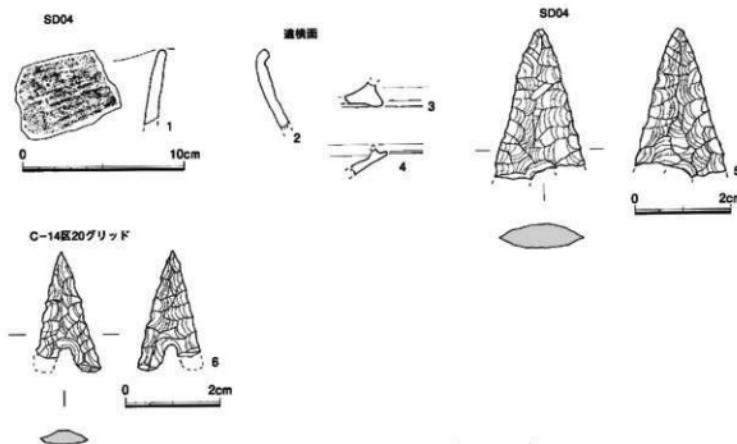


Fig.22 II-1区各遺構出土遺物 (1/3・1/1)

(3) II-2区の検出遺構

① 不定形土坑

SX17 (Fig.19、PL.6)

調査区北側で検出した不定形の落込み。一部で全体の形状は不明。中央部に段を持ち、また土層の状況

から別造構の切り合いの可能性があり、北側をSX17-1区、南側をSX17-2区としている。底面には浅いピットがある。底面までの深さは南側4cm、北側18cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルトを主体とする。出土遺物は縄文土器らしき細片が少量出土している。SX18と接合している。

② 造構面出土遺物 (Fig23, PL7・14)

1・2は造構面の落ち込みSX18とした部分から出土。1は北側の土坑SX17出土の細片と接合している。縄文時代中期末葉の阿高系の鉢底部。復元底径13.0cmを測る。胴部外面幅広の継ぎの四線で、他はナデ調整。色調は鈍い黄橙色を呈し、胎土は滑石、白色砂粒などを多く混入。焼成は良好。2は龍泉窯系青磁碗片。内面ヘラ切り文が入る。器表には緑灰色釉がかかる。胎土は灰白色で精良。3は滑石製円板の1/2片。西壁トレチア灰黄褐色シルト質細砂から出土。残存径3.0cm、厚み0.3cmを測る。表面はケズリ後ケンマ調整で擦痕が残る。色調は灰色を呈す。

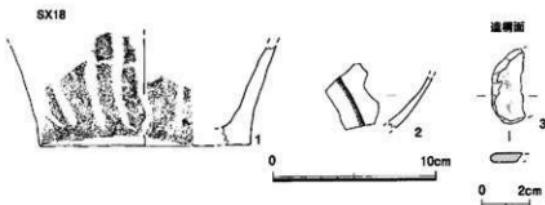
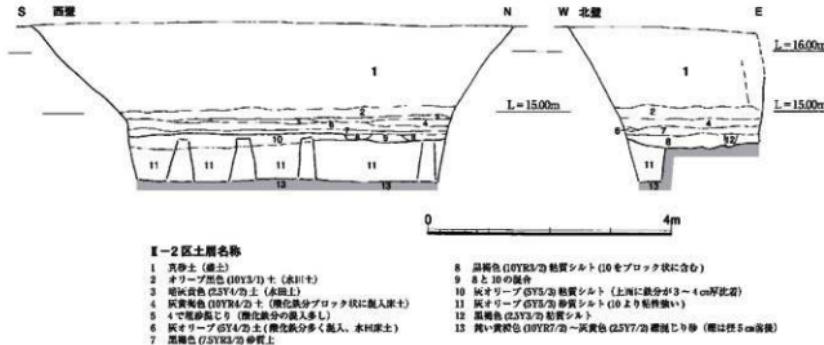


Fig.23 II-2区各壁土層と出土遺物 (1/80・1/3・1/2)

4. III区の調査

(1) 調査区の概要 (Fig.25、PL.7・9)

道路の東側、中学校校庭北側の細長い調査区。現状は農地であった。遺構は20cm程の水田耕作土下の灰オリーブシルト粘土上面で検出した。水田直下であったためか、遺構面には酸化鉄分が沈着し、また炭化物細粒を含んでいた。検出遺構は自然流路と思われる溝跡1条、礫群2基、浅い不定形状の土坑、ピット群などである。

(2) 検出遺構

① 溝状遺構

SD30 (Fig.24・27、PL.8)

調査区北側で検出した自然流路。一部の検出で全容は不明であるが、深さは0.6m程を測る。埋土は粗砂及び細砂で下層は鉄分が沈着し赤みを帯びていた。砂は斜めに堆積し、短時間に埋没した状況を示す。小さな流木など木質遺物が下層から出土しているが、木製品の出土はない。

出土遺物 上層から下層で、縄文から古墳時代頃の土器が出土しているが、土器は細片で摩滅を受けていた。黒曜石剥片も1点出土している。1・2は縄文土器か。1は鉢の口縁部細片。調整は雑なナデ。色調は暗褐色を呈し、胎土は微砂粒を少量含む。2は粗製の鉢の胴部片。外面は粗い条痕、内面はナデ。色調は鈍い褐色を呈し、胎土は1mm内外砂粒を多く含む。1・2共焼成は良好。

② 矽群

SX24 (Fig.26、PL.8)

調査区北側の矽石を含む暗灰黄褐色粗砂の埋土の落込みSX25内で検出した。東西長1.3m、南北長1.3m、最大深さ0.2mの不定形土坑の中で検出した。最大20cmの自然矽が集中していた。焼石などはなかつた。矽石は花崗岩が多い。不要な石などを埋め込んだものか。

出土遺物 縄文土器から古墳時代の土器類と思われる細片が少量出土しているが、図示出来ない。

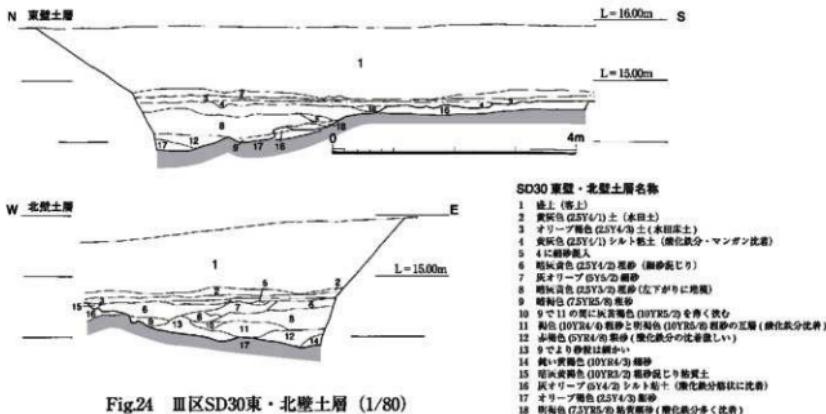


Fig.24 III区SD30東・北壁土層 (1/80)

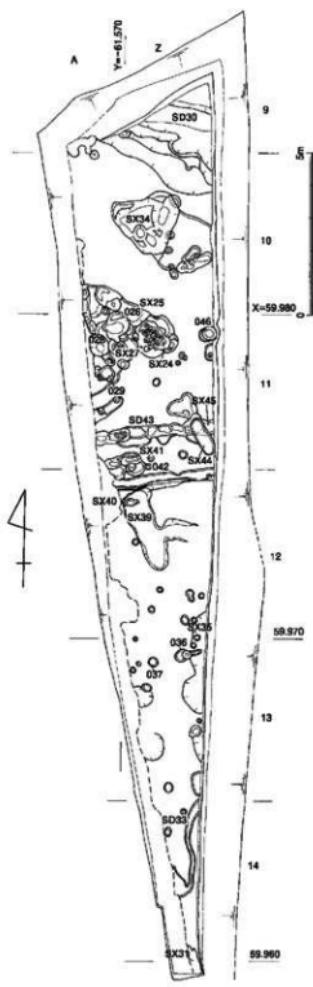


Fig.25 III区遺構全体図 (1/150)

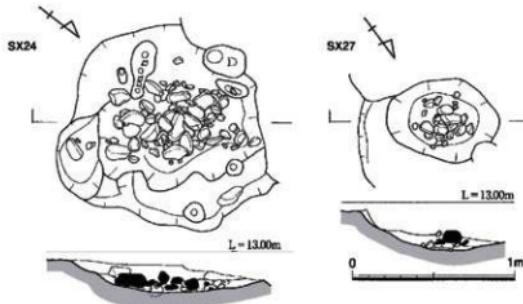


Fig.26 蕅群SX24・27 (1/30)

SX27 (Fig.26, PL.8)

SX24の西隣りで検出した藪群。長軸長0.68m、短軸長0.51m、深さ0.13mを測る平面形が梢円形状を呈する土坑内で検出した。藪石は長さ3~15cmの自然藪が雑然と集中する。出土遺物はなかった。

③ ピット出土遺物 (Fig.27)

北側の東壁寄りに円形ピットを数基検出した。埋土は鈍い黄褐色シルト粘土、灰オリーブシルト粘土で暗褐色粘土ブロック混入などである。埋土の色調から比較的新しい時期と思われる。3は青磁皿の口縁部。細片で口縁の傾きにやや不安があるが、龍泉窯系青磁皿I類と思われる。器表には光沢を持つ暗オリーブ釉が厚めにかかる。

④ 不明遺構出土遺物**SX35・39出土物 (Fig.27, PL.14)**

4はSX35、5はSX39出土。いずれも浅い落込みで明瞭な遺構ではない。4・5は縄文時代中期阿高式系土器深鉢の胴部上半部片。外面に凹点文を施し、内面はナデ調整。色調は黒褐色を呈し、胎土に滑石粉末を多く含む。焼成は良好。

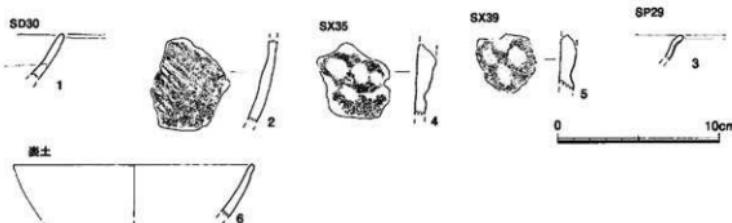
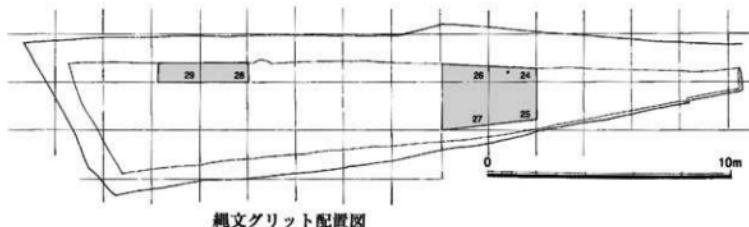
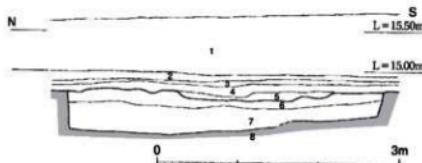


Fig.27 III区各遺構出土遺物 (1/3)



縄文グリッド配置図

24-26グリッド東壁土層



Ⅲ区 24・26・27 グリッド東壁土層名録

- 1 土上（表土）
- 2 黄灰色土（水成土）
- 3 オリーブ褐色（G25Y4/3）上
- 4 淡湖褐色（G10Y3/1）粗砂混じり土
- 5 磁褐色（G17Y2/3）粘質シルト（炭化物細粒多く混入）
- 6 淡オリーブ（G15Y5/2）粘質シルト（炭化物細粒少々混入）
- 7 淡オリーブ（G15Y5/2）粘質シルト（鉄分少式）
- 8 黑褐色（G23Y6/3）粘土（骨まりがある）

Fig.28 Ⅲ区縄文確認グリッド配置図と土層 (1/200・1/60)

⑤ 表土出土遺物 (Fig.27)

6は青磁碗。口縁部片で復元口径15.0cmを測る。内外面光沢を持つオリーブ黄色の透明釉がかかり、粗い貫入が入る。胎土は灰白色で精良。

⑥ 遺構面の調査 (Fig.28)

遺構面に縄文土器細片や炭化物を含むか所があったので、2.6×4.0mの小調査区を設定し、遺構面を0.2～0.5m程掘り下げ、遺物・遺構の確認を行った。遺構面下0.15cmほどの所で縄文土器と思われる細片が出士したが、包含層や遺構は確認出来なかった。

5. IV区の調査

(1) 調査区の概要 (Fig.29, PL.9)

この調査区も駐車場であったためか、碎石・真砂土を主体とした盛土が0.8~1m厚であり、その下は厚さ0.1~0.3m厚の水田土、黒褐色粗砂混じり粘質土（遺物包含層か）、遺構面となる。遺構面は、南側は黒褐色粘質シルト、北側では暗灰黄色粘土で砂礫混じりとなる。南側は遺物を含む包含層であり、この下に溝や土坑、川跡があり3面の調査となった。検出遺構は第1面では溝3条。第2面は溝・川跡4条と土坑2基などである。

(2) 第1面の調査 (Fig.29)

遺構は南側で検出した。北側は砂礫層で土器細片を含む浅い落込みがあったが、遺構は確認出来なかった。

① 溝状遺構

SD51 (Fig.29・31, PL.10)

調査区中央南寄りで検出した東西方向に蛇行して流れる小溝。幅0.5~0.7m、深さは最大で10cm程である。埋土は粗砂で、底面には酸化鉄分が沈着していた。また溝沿い両側には粗砂があふれ、根株痕や足跡と思われる多数の窪みがあり、中に粗砂が詰まっていた。北側部分には水が流れたような窪みが認められた。この溝は水路で両側に水田があった可能性がある。

出土遺物 土器片、須恵器片が少量と黒曜石剥片が出土している。1は須恵器坏蓋口縁部。II A期のもの。口縁は直立し、天井部の境に明瞭な段を持つ。また口唇内面は段を持つ。天井部は回転ヘラ切り、他は回転ナデ。色調は灰色を呈し、胎土は精良。8は黒曜石の縦長剥片。両側面に二次調整を加えている。全長3.15cm、最大幅1.1cmを測る。

SD52 (Fig.29, PL.10)

調査区南側で検出した小溝。幅0.2m、深さ0.1mを測る。埋土は黄色細砂で、時期的に新しい。

SD53 (Fig.29・31)

SD51南側に並行して検出された浅い溝。最大幅1.15m、深さ0.05~0.2mを測る。埋土は上層が黒褐色から暗灰褐色粘質土で、下層に純い黄褐色粗砂を混入する。底面は凹凸が激しい。この溝も水田に伴う水路の可能性がある。

出土遺物 古墳時代から中世にかけての土師器や須恵器、瓦質土器の細片が数点と鉄滓が1点出土。2は須恵器壺頭部片。外面は木目直交の格子目タタキ、内面は同心円状の当て具痕が残る。色調は灰色を呈し、胎土に1mm内外砂粒少量含む。

② 包含層出土遺物 (Fig.31, PL.14)

D・E-7~9グリッドにかけては遺構面が遺物を含む包含層であり、また西壁沿いのトレンドで下に粗砂層を確認し、遺構の存在が予想されたので、人力で掘り下げた。弥生土器や中世土師器などが少量出土した。北側遺構面で検出したものも含めて報告する。

3はE-8区出土。中世土師器の小皿底部片。復元底径7.6cmを測る。底部糸切りで板状圧痕が残る。色調は純い褐色を呈し、胎土は金雲母細粒を含むが精良。4~6は弥生土器。4はE-6区の遺構面で検出したもの。須玖1式の口縁部細片。器壁は摩滅し調整は不明。色調は橙色を呈し、胎土は精良。5・6は弥生時代中期初め頃のもの。口縁部が断面三角を呈し、5の端部には刻目がかすかに残る。色調は5が褐

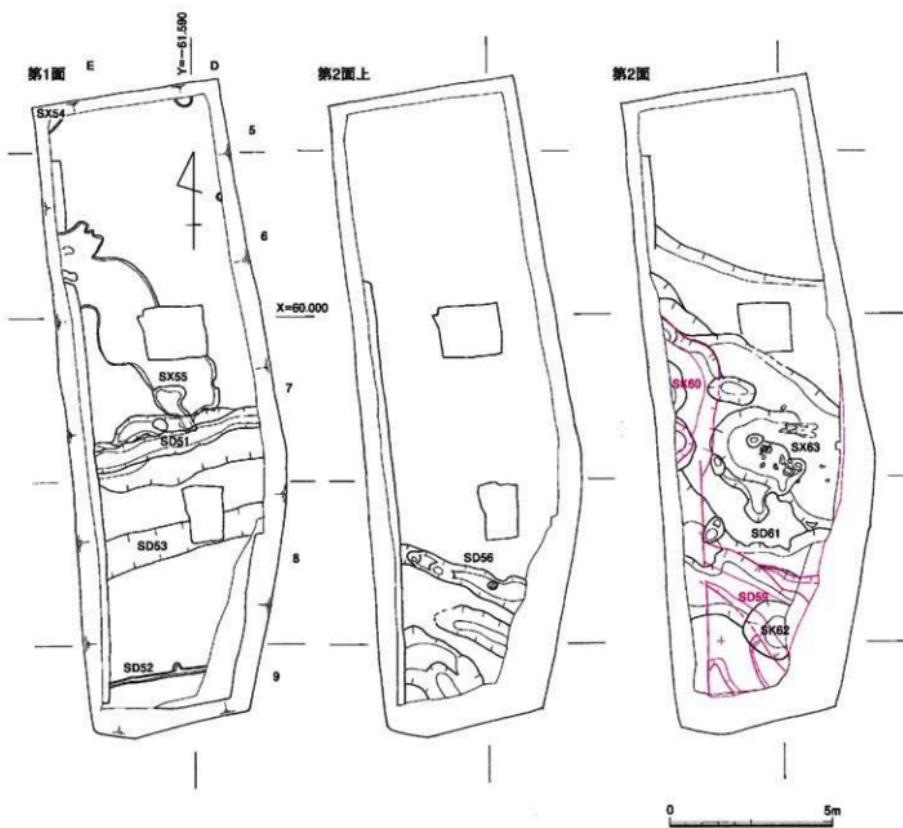


Fig.29 IV区遺構全体図 (1/150)

灰色、6が鈍い黄褐色を呈す。胎土はいずれも1~2mm白色砂粒を多く含む。7は上げ底の底部片。復元底径7.6cmを測る。器壁はやや摩滅するがナデ。色調は暗赤褐色を呈し、胎土は1mm内外白色砂粒を多く含む。9はD-8区出土。小型の磨製石斧片。残存長4.5cm、最大幅3.7cmを測る。全体に摩滅がひどいが、ケンマ仕上げである。10はE-8区包含層上層出土。昭和17年に鋳造されたアルミ製の5銭貨幣。このタイプは15~18年まで鋳造されている。

(3) 第2面の調査 (Fig.29, PL.10)

D・E-7~10区にかけて第1面下で検出した。第1面より0.2m程下がった灰オリーブ粘質シルト、又は黄褐色から暗灰黄砂質土上で検出した。流路を度々変えた川跡や自然流路4条、土坑2基を検出した。

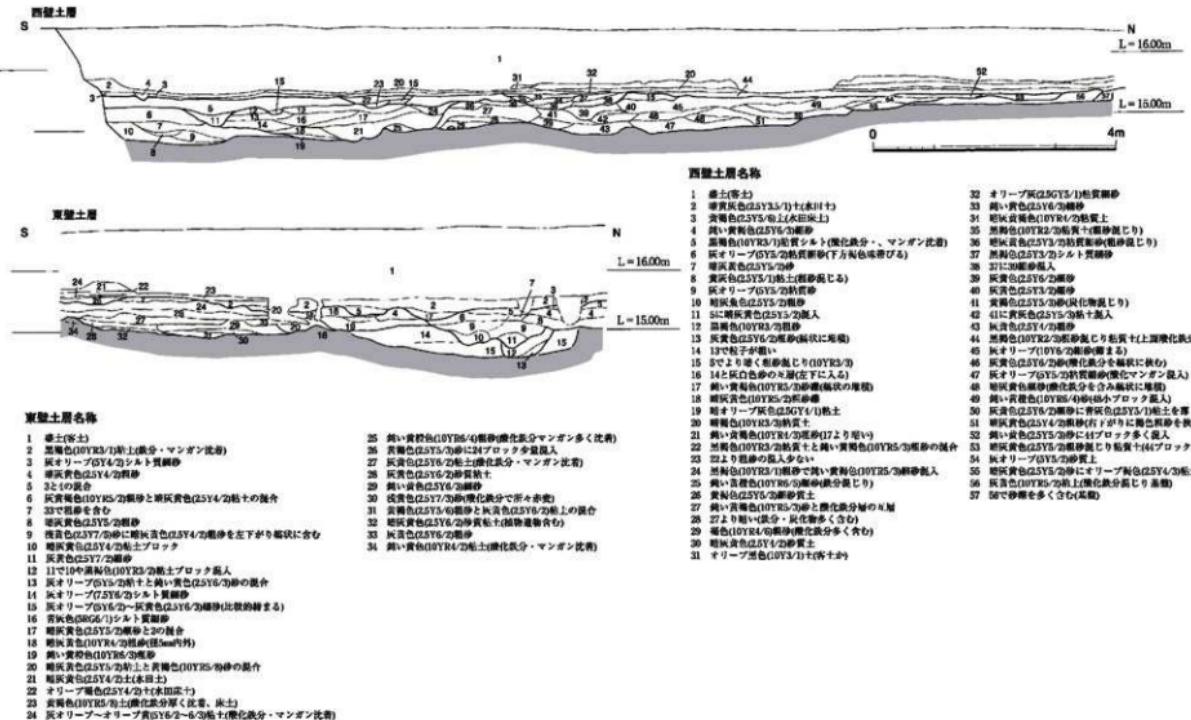


Fig.30 N区西・東堀土層 (1/80)

① 溝状遺構

SD56 (Fig.29)

D・E-9区で検出した北西から南西に延びる小溝。幅1.05m、深さ0.2mを測る。埋土は黒褐色粗砂で、自然流路である。

出土遺物 古墳時代以前と思われる土器細片が1点出土。細片で図示出来ない。

SD59 (Fig.32, PL.11・12)

調査区南側で検出した蛇行する川跡。幅は一定しないが3.6m、深さ0.6mを測る。南東側は平面円形の土坑SK62がある。埋土は粗砂を主体とし、粘土層を挟まず、絶えず粗砂が流れた状況を示す。

出土遺物 磨滅した土器片が3点と黒曜石剥片が1点出土。細片で図示出来ない。

SD61 (Fig.32, PL.11・12)

SD59に切られた川跡。川幅は5m以上、深さは0.4m程である。西側は大型の半円形状の土坑SK60と、底面にはSX63とした落込みがあり、加工痕がある丸太材があった。埋土は粗砂または細砂の乱れた堆積で、SD59と同様粘土層は含まない。洪水などで埋没したのであろう。

出土遺物 磨滅するが縄文土器と思われる土器細片が7点出土している。

② 土坑

SK60

E-8区で検出した平面が半円形状の土坑。確認幅5m以上、最大深さ0.4mを測る。埋土は川跡の粗砂に比べて粒子の細かい砂で粘性を持つ。**出土遺物** はなかった。

SK62 (Fig.32, PL.11)

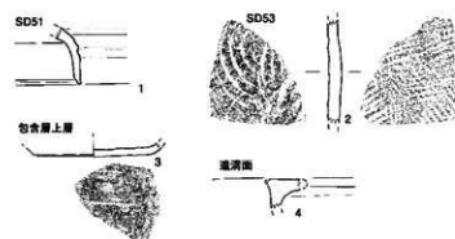
SD59に切られる平面形が円形を呈する土坑状の落込み。最大径は1.7m、最大深さ0.4mを測る。埋土は灰黄色細砂で黒褐色粘土ブロックなどを混入する。**出土遺物** はなかった。

③ 不定形土坑

SX63 (Fig.32・33, PL.12・13・14)

SD61の底で検出した平面形が不定形の浅い土坑。流水などによる溜まり状の落込みと思われる。この部分から、大型の自然の倒木が埋没した状況で出土した。その周辺

包含層



SD51

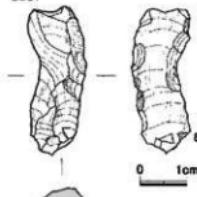


Fig.31 IV区各遺構出土遺物 (1/3・1/2/1/1)

から縄文土器片や小さな流木なども出土した。倒木が埋没したことによって流れが乱れ、川底に堆みを生じたのであろうか。

出土遺物 11~13は縄文土器。11は縄文晩期前半黒川式土器直前頃の精製の浅鉢。復元口径30.8cmを測る。口縁内面に段を持つ。色調は黒褐色を呈し、胎土に1mm内外細砂・金雲母を多く含む。12・13は同一個体で縄文時代後期中葉頃の鐘崎式土器片。12は波状口縁で外面ヨコ方向の沈線文様を施す。13は肩部。外面沈線で渦巻状の文様を施す。内面はナデで、粗い擦痕が残る。色調は黒褐色を呈し、胎土は微砂粒と金雲母を含む。やや脆い。14は倒木。残存長123.5cm、直径38.5cmを測る。砂中に大半が埋没していたが、掘り出すと根本が両側二股状になっており、一見加工されたような状況が見られたが、芯が腐って中空状を呈し、明瞭な加工痕跡ではないことから結果として自然倒木と判断した(註1)。ただ大木で、重量もあることから近くに生えてるもの、倒れて当地点まで流され埋没したものと考える。樹種はクスノキである。放射性炭素年代測定では 3350 ± 40 BPという測定結果が出ている。

註1. 首都大学東京教授 山田昌久氏のご教示による

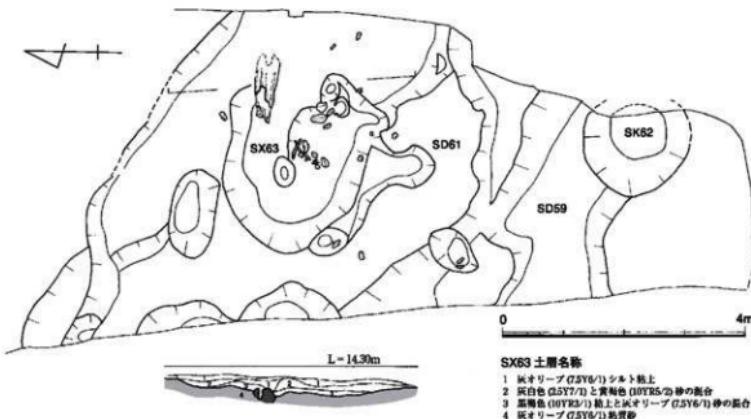


Fig.32 SD59・61、SK62、SX63 (1/80)

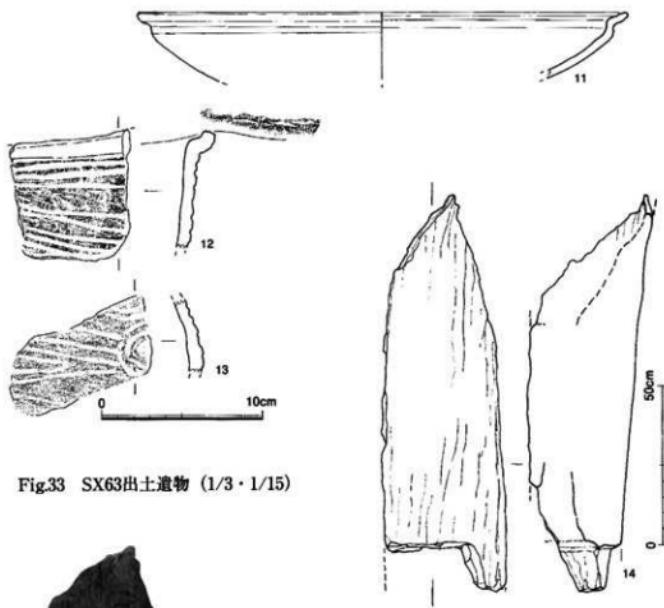


Fig.33 SX63出土遺物 (1/3 · 1/15)



SX63 出土倒木

6. 田村遺跡第23次調査の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

田村遺跡は、室見川右岸の沖積地に位置し、これまでの発掘調査で縄文時代から中世に至る遺構・遺物が検出されている。

今回の分析調査では、第IV区の自然流路落込みSX63から縄文時代後期末～晩期初頭の土器片と共に出土した丸太材を対象として、遺構の年代や古植生を検討するために年代測定・樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、第IV区第2面の自然流路落込みSX63から出土した直径40cmの丸太材1点であり、分割した木片の状態で送付されてきた。木片を観察した中で、最も外側の年輪部分から年代測定試料を採取した。また、最も保存状態の良い部分から、樹種同定試料を採取した。

2. 分析方法

(I) 放射性炭素年代測定

土壤や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをビンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空中にして封じきり、500°C(30分) 850°C(2時間)で加熱する。液体空素と液体空素+エタノールの温度差を利用して、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシウウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いてδ13Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(On Sigma; 68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5730±40年)を校正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。試料が木材であることから、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

(2) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クローラー(抱水クローラー、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称と特徴は、島地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

3. 結果

同位体効果による補正を行った測定結果と樹種同定結果を表1、曆年校正結果を表2に示す。丸太材は、常緑広葉樹のクスノキで、補正年代は、 $3,350 \pm 40$ BPを示す。また、測定誤差を σ として計算させた曆年校正結果は、calBC1,688-1,539である。クスノキの解剖学的特徴等を記す。

・クスノキ (*Cinnamomum camphora* (L.) Presl) クスノキ科ニッケイ属

散孔材で、道管径は比較的大径。管壁は薄く、横断面では梢円形、単独または2-3個が放射方向に複合して散在する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高。柔組織は周囲状～翼状。大型の油細胞が認められる。

表1. 放射性炭素年代測定および樹種同定結果

地区	面	遺構	試料名	種類	樹種	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
第IV区 第2面		SX63	丸太材(直徑40cm)	木材	クスノキ	$3,350 \pm 40$	-24.28 ± 0.88	$3,330 \pm 30$	IAAA-92150

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2)BP年代値は、1950年を基準として何年前であるかを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

表2. 曆年校正結果

地区	面	試料名	補正年代 (BP)	曆年校正年代(cal)				相対比	Code No.
				σ	cal BC 1,688 - cal BC 1,607	cal BP 3,637 - 3,556	0.850		
第IV区 第2面	丸太材	$3,345 \pm 38$	σ	cal BC 1,572 - cal BC 1,559	cal BP 3,521 - 3,508	0.090		IAAA-92150	
			2 σ	cal BC 1,549 - cal BC 1,539	cal BP 3,498 - 3,488	0.080			

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を使用した。

2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3)1桁目を丸めるのが慣例だが、曆年校正曲線や曆年校正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

4)統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である

5)相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比を相対的に示したものである。

4. 考察

第IV区第2面のSX63からは、直径40cmの丸太材と共に縄文時代後期末～晩期初頭の土器片が出土している。残存する最外年輪を対象とした年代測定では、補正年代で $3,350 \pm 40$ BPの値が得られており、出土した土器とも概ね調和的である。また、丸太材は、広葉樹のクスノキであることが確認された。クスノキは、樹高30m以上、直径5mに達することがある常緑高木である。この結果から、当該期の自然流路の周囲にクスノキが生育していたことが推定される。

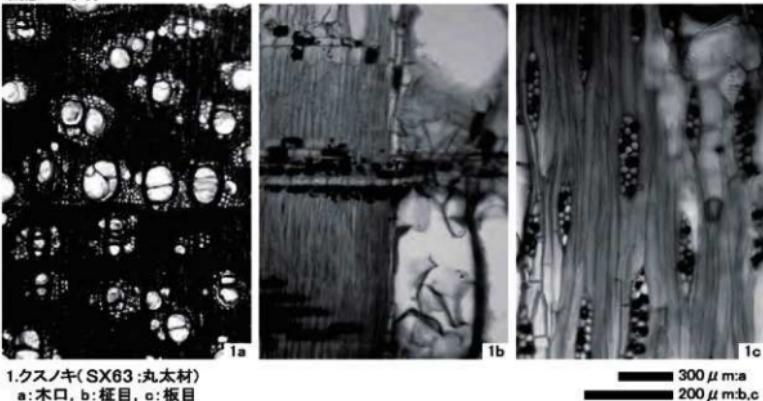
本遺跡では、弥生時代中期を中心とした杭材や櫛構築材の樹種同定でアカガシ亞属、シイ属、サカキなどの常緑広葉樹を主体とした結果が得られており、クスノキも建築部材などに確認されている(鷺倉,1984)。常緑広葉樹を主体とする木材利用は、隣接する四箇遺跡の弥生時代～古墳時代の木製品でも認められる(鷺倉,1978;林・松本,1987;伊東,1989)。こうした結果から、弥生時代中期頃には常緑広葉樹を主体とした広葉樹林が見られたことが

推定される。一方、野芥大蔽遺跡の縄文時代後期とされる自然木では、常緑広葉樹のアカガシ亜属、落葉広葉樹のカエデ属、針葉樹のマキ属やヒノキ科等が混在する結果が得られている(パリノ・サーヴェイ株式会社,1998)。このうち、マキ属は、アカガシ亜属などと共に常緑広葉樹林を構成する種類である。これらの結果から、縄文時代後期の遺跡周辺地域にも常緑広葉樹を主体とした植生が見られ、河道沿いの林縁部等には落葉広葉樹のカエデ属等も生育していたと考えられる。今回の結果は、既存の調査事例とも調和的である。

引用文献

- 林 弘也・松本 肇,1987,四箇遺跡から出土した木製遺物について、「福岡市早良区四箇遺跡」,福岡市埋蔵文化財調査報告書第172集,福岡市教育委員会,179-182.
- 林 昭三,1991,日本産木材 顯微鏡写真集,京都大学木質科学研究所.
- 伊東 隆夫,1989,四箇遺跡群23次調査河川出土木材の樹種,「四箇遺跡群 第23次調査報告書」,福岡市埋蔵文化財調査報告書第196集,福岡市教育委員会,35-38.
- 伊東 隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載I.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- 伊東 隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載II.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.
- 伊東 隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載III.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- 伊東 隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載IV.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- 伊東 隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載V.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,1998,遺跡周辺の古植生および植物利用,「福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告4 野芥大蔽遺跡第1次調査」,福岡市教育委員会,83-96.
- 島地 謙・伊東 隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.
- 鶴倉 己三郎,1978,福岡市四箇J-10地区出土杭材の樹種について,「福岡市西区四箇周辺遺跡調査報告書(2)」,福岡市埋蔵文化財調査報告書第47集,福岡市教育委員会,1-24.
- 鶴倉 己三郎,1984,木製遺物の樹種,「福岡市早良区田村遺跡II」,福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集,福岡市教育委員会,33-69.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

図版1 木材



1.クスノキ(SX63:丸太材)
a:木口, b:径目, c:板目

7. 小結

第23次調査のまとめを行う。今回の調査で検出した遺構はそれ程多くなかった。遺構の時期は数少ない遺物から推定すれば、縄文時代から中世頃であろう。調査区西側の第4次調査区では縄文時代後晩期の包含層や、11世紀を中心とする古代から中世の集落跡が調査されており、第23次調査区もほぼ同様の時期のものである。I・II区は第4次調査区の東側に隣接するが、第4次調査区東側は遺構が薄くなっているので、I区・II区も遺構の薄い地点であろう。ただIII区では柱穴や躰跡などの集落遺構が検出されており、III区の東側に遺構が集中する可能性がある。縄文時代の遺物は遺構面から出土するものの、良好な包含層や遺構については今回の調査では確認出来なかった。IV区の川跡は、遺物の出土が少なかったものの、縄文時代晩期以降の可能性がある。

田村遺跡は現在26次を数える調査が行われており、縄文時代早期から江戸時代迄、各時代の遺構・遺物が調査されている。遺跡の中心時期は縄文時代後晩期、弥生時代、平安時代後期から室町時代初めにかけての3時期である。遺跡の中心は広範な調査が行われた第2次～第6次調査区で、各時期の遺構が濃密に検出された。また田村遺跡北西部に位置する第7次～第11次調査区では早良郡の条里地割に沿う中世溝が検出されている。同様の溝は野芥大蔵遺跡や原遺跡第10次調査でも確認されており、早良郡の条里を考える上で重要な遺跡である。田村遺跡で特に注目されるのは平安時代後期から室町時代初期にかけての集落遺構である。総数200棟を超える掘立柱建物が検出され、それらの遺構に伴って多量の輸入陶磁器が出土した。これらの遺構群は該期の村落構造を研究する上で、重要な情報を提供している。

田村遺跡一帯は古代から中世にかけては能解郷から野芥庄となる。野芥庄は野芥を遺称地とする莊園である。永治元年（1141）の鳥羽法皇の寵姫美福門院（藤原得子）の御誓願寺として建立された歎喜光院（現京都市左京区）に寄進された莊園で、美福門院を母とする鳥羽天皇女八条院（暲子内親王）へ伝領された。安元二年の「八条院目録」に「筑前国野芥」とある。野芥庄はその後、本家職は度々伝領を繰返し、嘉元四年（1306）には龜山天皇女昭慶門院領となる。野芥庄はまた庄内の海岸部近くに塩浜があったという。野芥庄を本拠地とする在地領主に野芥氏がいる。野芥氏は関東御家人で、岩門合戦では活躍し恩賞を受けている。室町時代になると少弐冬資から柳氏が兵糧料所として預けおかれていた。その後、大内氏の被官飯田氏が支配する所となるが、領家支配は戦国時代以降見られなくなる。重留に溝所という地名がある。政所から来ている地名であり、莊園を管理する家政機関があった可能性がある。以上のことから田村遺跡で見つかっている中世集落は時期、場所からして野芥庄に関わり深いものと考える。微高地上に集落が立地し、第7次調査区のような低地部に、条里地割に沿った水田が営まれていたものと考える。

註 野芥庄関係は『四国・九州地方の莊園 講座日本莊園史10』（2005）と『福岡県の地名 日本歴史地名大系41』（2004）に基づいて執筆した。





(1) 路線全景(調査区から第21・22次調査区を見る)



(2) 調査区全景(南から)

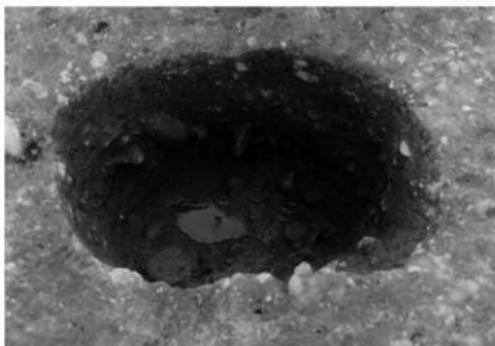
PL. 2



(1) 調査区全景(上から)



(2) I区全景(南から)



(1) SK01(東から)



(2) I区調査区北壁土層状況(南から)



(3) II-1区全景(上から)



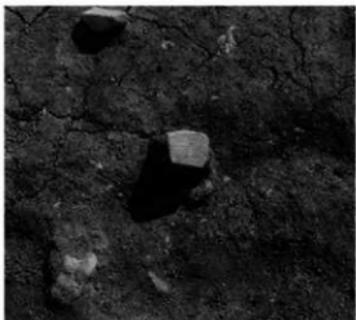
(1) II-1 区全景(南から)



(2) SD04 検出状況(北から)



(1) 縄文確認グリッド配置状況(北から)



(2)



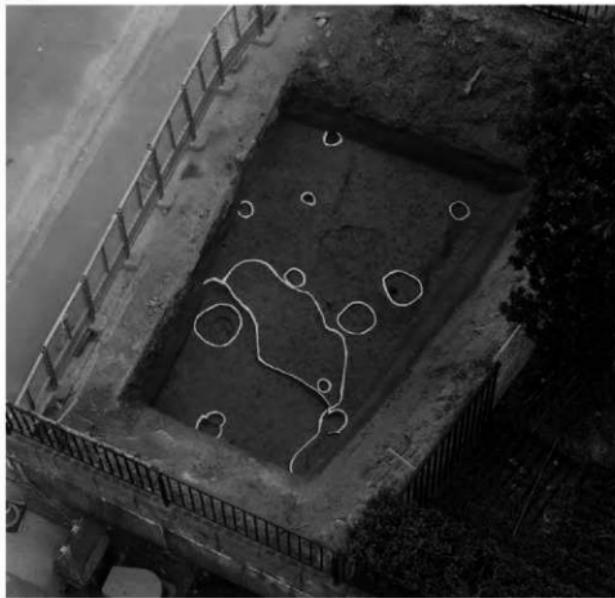
(3)

(2) SD04 縄文土器出土状況

(3) 調査区西壁土層(南東から)



(4) SD04 北壁土層(南から)



(1) II-2区全景(北西から)



(2) SX17(西から)



(3) II-2区西壁土層(東から)



(1) SX18 遺物出土状況(西から)



(2) III区全景(北から)



(1) 穂群 SX24・27(北東から)



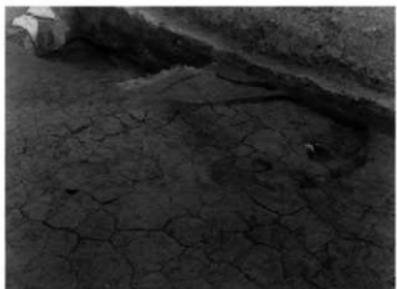
(2) SX24(南西から)



(3) SX27(北西から)



(4) SD30(南西から)



(5) SX34(南西から)



(1) III・IV区全景(上から)



(2) IV区全景(西から)



(1) IV区第1面南側 SD51・52 検出状況(北西から)



(2) 同 第2面遮擋検出状況(南から)



(1) 第2面 SD59・61(南から)



(2) SD59(北西から)



(3) SD59・61(北西から)



(4) SK62(西から)



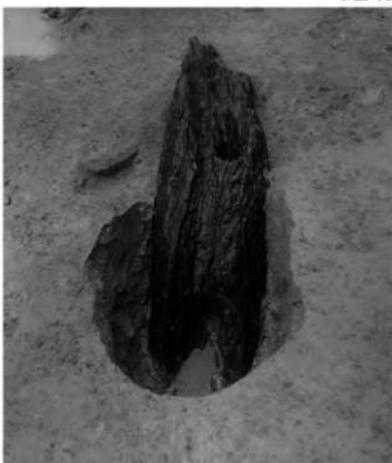
(1) SX63、SD59・61（北西から）



(2) SX63（西から）



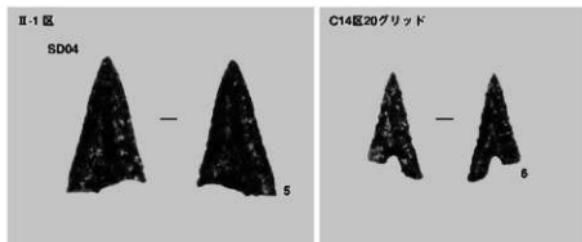
(1) SX63 縄文土器出土状況（北西から）



(2) 同 倒木出土状況（西から）

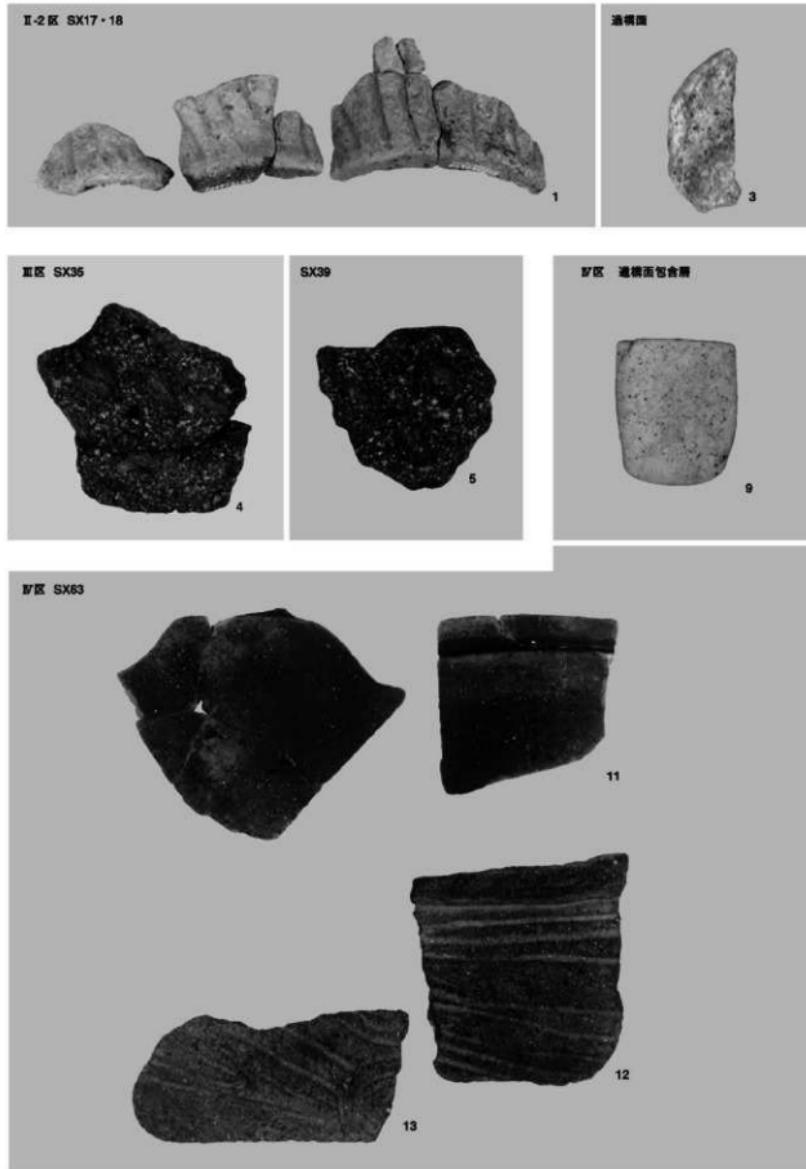


(3) 同 倒木根本の状況



(4) 各遺構出土遺物 1 (縮尺不統一)

PL. 14



各遺構出土遺物 2 (縮尺不統一)

報告書抄録

ふりがな 書名	たむら 田村16						
副書名	田村遺跡第22次調査、第23次調査報告						
巻次	16						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	1080						
編集機関	阿部泰之、山崎雅雄						
所在地	〒810-8621福岡市中央区天神1丁目8-1 TEL092-711-4667						
発行年月日	西暦2010年3月23日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
田村遺跡 第22次調査	福岡市早良区山村4丁目 地内	40130 0317	33° 32° 24'	130° 20° 2°	2007/03/1 ~ 2008/03/1	495.95	道路建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
田村遺跡 第22次調査	集落	中世	掘立柱建物・溝	土器器・陶磁器			
要約	第22次調査では、溝1条・土塹1基・掘立柱建物1棟・ビット・旧河川を検出した。溝は第21次調査区検出の溝に接続するもので流水の跡が観察され水路ともみられる。出土遺物から時期は11世紀後半から12世紀前半との所産か。水路は東里に沿っており旧河川から導き水し水田の灌漑に利用されたと考えられる。旧河川河床からコンテナ1/5箱程度の縄文土器が出土した。小片で率減し時期の特定は難しい。散漫な出土状況から上流の流れ込みと見られる。						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
田村遺跡 第23次調査	福岡市早良区山村4丁目 地内	40130 0317	33° 32° 32°	130° 20° 5°	2008/09/1 ~ 2008/11/21	781	道路建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
田村遺跡 第23次調査	集落・ 包含層	縄文時代・中世	包含層・土坑・川跡	縄文土器+古墳時代土器等+ 古代土器等・須恵器・中國產 輸入品等			
要約	調査区は既存道路によってI~IV区に分かれる。I-II区は出土遺物時に厚く盛土されていた。主な検出遺構はI区では土坑II区、II区はII-1区と2区に細分した。II-1区は自然流路の溝1条と不定形土坑。II-2区は土坑と溝、III区は旧川跡、窪群、ビットなどである。IV区は2つの遺構面を確認した。旧河川2条、土坑などである。川跡からは縄文晚期の土器とクヌキの倒木が出土した。						

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1080集

田村 16

— 田村遺跡第22次調査、第23次調査報告 —

平成22年3月23日

発行 福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 有限会社 アートプロセス
福岡市南区高木二丁目8番7号